

2年間の「文字を書くこと」の取り組み

国語教育講座・東 賢司

はじめに

書写書道概説は、中学校の国語免許を取得するための必修科目である。国語専修の学生にとっては、卒業要件になるいわゆる「◎」の単位である。

受講生は、半期 50 名ほどであるが、国語先週の学生は三分の一ほどであり、副免許を取得する学生が非常に目立っている。

中学校書写に関する科目は、この単位のみとなっており、種々のことを伝える必要がある。ただ、近年の学生の実践活動をみていると、「文字を書くのが遅い」「文字が乱雑で詠みにくい」などの問題点があり、概説を語って終わりというわけにはゆかない現状がある。そのために「大学生として恥ずかしくない実技力を身に付ける」ことを目標として、授業を組み立ててきた。この報告ではその活動がどうであったのかを省察してみたい。

1. 授業の目的

シラバスには以下の記載をしている。

一般的包括的な内容を含む中学校の国語の教員免許状取得に必要な科目であり、中学校国語の学習指導要領中の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「(2) 書写に関する次の事項について指導する」第一学年「ア 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書で書くこと。」「イ 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと」、第二学年「ア 漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く書くこと」「イ 目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書くこと」、第三学年「ア 身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと」の内容を段階的に学び、文字を正しく整えて書くための

学習を行うとともに、授業実践に必要な力を身につける。

また、上記は最低限の習得のレベルであり、発展的な学習によって大学生として恥ずかしくない「文字を書く実技力」を習得する。

長々と書いているが要するに「授業や授業外の時間を通して自分の書く文字に自身が持てること」である。

2. 学部 DP との対応

本年度は、シラバスの到達目標覧に以下のことを記入した。

(1) 知識・理解...国語の書く行為の重要性を理解し、教師の教養として必要な文字を書く知識や情報を身につける。

(2) 技能・表現...中学校での学習内容(字形の整え方、行書の書き方、効果的な文字の書き方等)を体得し、漢字・仮名の板書の文字が正確にわかりやすく書くことができる。基本的な行書の文字を教材化することができる。大学生として恥ずかしくない書写実技力を身につける。

(3) 態度...他者との関わりによって文字を大切にすることを高め、自信を持って自ら進んで丁寧に書こうとする姿勢を身につける。

最も重視しているのが(2)の部分である。

「国立大学出の学生は口ばかりで…」というフレーズを愛媛にきてからも何度も耳にした。このような批判は、書写に関しても当てはまる。口だけで指導する教師にはなっほしくないという、小さな願いを持っている。

3. 授業を行う上での工夫

講義時間は 90 分、毛筆学習にしても硬筆学習にしても、時間が足りないことは言うまでもない。昨年も今年も、始業のチャイムが鳴っている時には、既に授業は開始されている。また、終業のチャイムが鳴っているときには、ほぼ片付けが終了している。

実技指導の授業が最も難しいのは、時間を守って授業が展開できることである。特に毛筆時には、それが難しい。チャイムが鳴る前に授業が始まっていると、最初のうちは「何でもやっているの？」という感じであったが、中盤以降には、開始時間前に集合する学生がほとんどとなった。また、授業外の課題を 180 分間しっかりさせることに注意した。基本的には復習は、授業時間に消化することができなかった課題を完成させること、また次回の予習としては、次回の講義に欠かせないものを学習させたり、板書の試験を数回行い、そのテーマ（例えば、五十音の平仮名、小学校の楷書等）をしっかり練習しておかないと確認作業に対応出来ないものを設定した。

また、教材であるが、本来中学校では、行書学習が主体となるが、行書学習は、楷書学習がきちんとできて初めてできる書体である。受講生の多くが、「平仮名が正確に書けない」「漢字の正しい筆順が身につけていない」という現状を考えると、平仮名や楷書の学習にある程度の時間をかけざるを得ない。結果的に、行書学習が不十分になるということはあるが、現状を受け入れざる終えない。少しでも効率化を図ることができるように、教材を厳選し、講義外でも取り組むことができるワークシートも作成した。

4. 授業の達成感

数名の学生に聞き取り調査を行った。それは、以下の点による。従来行ってきた記述式のアンケート調査では、問題点が十分に把握出来ないということがわかり、本年度は、試みにやり方を変えてみた。原因としては、以下のことがあると思われる。

通常の手書き文字は、1 cm～2 cmほどの小さな文字である。文字の完成度は、手先の器用さが影響する。「頭で分かる」→「実際にできる」には段差がある。また、それ以前に「なぜうまくゆかないのか」という問題点の把握ができない学生も多い。このようは学生

には「文字は書ければいい」「文字はわかればいい」という観念も否定できない。

延べ数十回の教員との対話により、学生が感じている問題点が見えてきた。

①講義の進度

相当に早いと感じている受講生と遅いと感じている受講生の差が大きい。「丁寧に書く」という書写の常識に違和感を感じている受講生が多い。

②講義のレベル

教師が求めている「大学生としてのレベル」が相当に高いと感じている受講生ともっと高くてもよいと考えている受講生の差が大きい。

③自分の文字の分析について

文字のどこをなおせばいいのか理解できていない受講生が多い。これを解決するには、1対1の指導が必要であるが、毎回受講生全員に行くことは非常に難しい。

④毛筆学習について

特に、行書を書く事について苦手意識を持っている学生が多い。柔らかさを指先に感じられるようになることは、毛筆上達の基本中の基本であるが、行書のような複雑な筆遣いになると表現ができないことをもどかしく感じている受講生の様子が分かる。

5. 次年度の課題

文字を書く事について、実技力を確実に自分のものとするは大変時間がかかる。近年、書写書道の学会では「いかに時間をかけないで、書写力を向上させるか」ということに研究の重心が置かれている（流行がそれにある）が、我々が文字を獲得し、字形を美しくかけるようになった過程を理論整然と説明できる者はそれほど多くはないのではないか。最初から計画的に理論的に学習をする考えを否定はしないが、そのような授業は概して、説明が長く、教師の自己満足だけが高い授業となっている。私もその傾向がないとは言いきれない。平成 21 年～ 22 年度の授業では、出来る限り「書くこと」の時間を確保することに注意してきた。結果的に、書き文字が上達してきた学生が多い。来年度はこれらの学生が教育実習を迎える。従来の学生とどのように異なるのか、注意深く見守りたいと考えている。